記念館会報　Vol. 30　　2020. 12. 23

NPO
中帰連平和記念館
CHUKIREN HEIWAKINENKAN

元撫順戦犯管理所婦長 趙毓英さん逝去

撫順戦犯管理所の看護婦長をされていた趙毓英（チョウ イクエイ）さんが 10 月 12 日 17 時過ぎに逝去（享年 93 歳）されたました。

趙毓英さんは南満医科大学の高級看護科に入学、2 年生の時に「撫順戦犯管理所」勤務を命じられました。その 21 歳の時に綏芬河での旧ソ連から中国への戦犯たちの移管にも立会い、管理所まで三日間列車で同行されました

969 人の戦犯たちはシベリア各地から綏芬河までは貨車をに三段に区切りぎゅう詰めでした。しかし、中国側では客車が待ち医師や看護婦が車内を巡り、「体調の悪い人はいませんか？」と聞き歩き、温かい食事も用意されました。

その後、趙毓英さんは管理所の婦長として長い間、戦犯たちの医療健康面に尽くして下さいました。男だけ管理所の環境の中で、背が高く優しく美しい彼女は彼らの「憧れの的」でした。退職後も中帰連や私たちの訪中には、何時も駆けつけて下さり、大変お世話になりなりました。

ご霊前に「受け継ぐ会、再生の大地合唱団、中帰連平和記念館」三者の名で弔文と献花を送らせて戴きました。心よりご冥福をお祈り申上げます。有り難うございまいした。

【趙毓英さんへの「献花」】

【医務室の趙毓英さん】

目　　次

・管理所元婦長 趙毓英さん逝去 ･････････ 1
・趙毓英さんへの「弔文」 ･････････････ 2
・「国際会議」オンラインで開催 ････････ 2
・「ジェンダーの会」来館 ･･････････････ 2
・連載 第 23 回「記念館資料室」から ･･ 2
・「橋本勝さんの風刺マンガ」 ･･････････ 4
・「一枚の写真」 ･･････････････････････ 4
・「蔵書紹介」 ･･････････････････････ 4

「趙毓英さまのご逝去を心から悼み、ご冥福をお祈りいたします」

趙さまは、撫順戦犯管理所の看護師として、日本人戦犯たちに優しく丁寧に接し、戦犯たちの憧れの的でした。

彼らは中国の寛大な人道主義的政策によって無事に帰国して「中国帰還者連絡会」を組織し、「平和と日中友好」のために終生戦いましたが、これに対してご理解とご協力を惜しまず、またその後継組織ともいう べき下記連盟の三者にも、ご理解ご協力を頂きました。「再生の大地」合唱団が訪中演奏を行った時にも、わざわざお出で下さり、励ましてくださいました。

趙さまのこうした言動を思い起こしますと、その美しいお姿と共に忘れがたく、お別れに際して哀惜の念に涙が止まりません。

どうぞ安らかに、そして天界に逝かれても、元戦犯の皆さまと仲良く明るく、そして不変の日中友好を語り合いながら、お過ごしくださることを信じて、お別れの言葉といたします。さようなら！

撫順の奇蹟を受け継ぐ会
再生の大地合唱団
NPO 中帰連平和記念館

「国際会議」オンラインで開催

世界各地で 3 年に一回開催されている「第 10 回 国際平和博物館会議」が今年 9 月 16 ～ 20 日に京都と広島で開催予定でしたが、世界的コロナの影響でネット開催になりました。

世界各地の平和博物館 80 館あまりが英語と日本語で紹介され、私たちの記念館は同封別紙の通りです。これは 200 頁余の本にまとめ各館に寄贈される予定です。

尚、毎年開催している「平和のための博物館会議・市民ネットワーク」の全国交流会もテレワークとなり、芹沢事務局長がオンラインで近況報告致しました。

『ジェンダーの会』来館

吉川春子さん（元参院議員）が代表を務める「『慰安婦』問題とジェンダー平等ゼミナール」の皆さん 15 人が、10 月 24 日来館下さいました。当初、30 人の予定でしたがコロナを配慮し 15 人にさせて戴きました。

当日は吉川代表の他に「慰安婦裁判」の弁護団長をされた大森典子弁護士や、都内の他に埼玉などからもご参加下さいました。

訪中体験のある方や「中帰連」を詳しくは知らなかった方もおり、熱心に 3 時間あまり視聴戴き有り難う御座いました。「カンパ」も頂き有り難う御座いました。

後日「男女平等をすすめる教育全国ネットワーク」（川崎市）が制作した、古川ひろしさんの絵、後藤ひろみさんの文による紙芝居**『慰安婦にされた少女たち』**も寄贈頂きました。

中国孟県の侯巧蓮さんがモデルの実話です。

（B4 判 16 葉）
購入希望は下記まで（2,400 円）
TEL&FAX：044-888-8953
E-mail：y-nagai09@y2.dion.ne.jp

連載　記念館資料室から

第23回「早くも始まった組織の停滞を前にして」

石田隆至（「中帰連に学ぶ会」事務局）

『前へ前へ』第13号は1958年9月15日発行

です。帰国から2年、創立を祝した第1回全国大会からちょうど1年後にあたります。

ただ、表紙には目立つ文字で「我々の組織を再確認しよう」とあります。内容的にも、前号と同様に国際情勢に関する学習資料が並んだ後、この特集に9ページが割かれています。早くも「再確認」を要する事態に至っていると考えたのは本部だけではありません。各支部からも、停滞の様子が報告されています。

「〔支部大会で〕中心となった議題は、組織が自然消滅の傾向にあり、どうして存続してゆくかということであった。そしてこの低調の原因は十一年間の補償と身分問題の解決に希望がもてなくなったからということを認めた。」（新潟支部）

「〔支部大会には〕連絡や会費の納入状況よりみてせいぜい十人位しか来ないだろうと考えていたが、なんと二十三人も集った。（略）四角ばった話しではなく久しぶりのわだかまりがとれたように次から次と話がはずんだ。（略）いつも皆と腹の底からぶちまけて話して・・・」（埼玉支部）

福島支部でも、支部報の発行や会計報告の遅れを支部長自らが反省している記事が見られます。つまり、帰国戦犯の単なる互助組織や利益実現団体としては限界が感じられ始めていたのです。新たな意義を見出していく必要がある段階に入っていました。

これに対し本部は、現在の活動の意義を「再確認」します。特に草創期の大きな目標だった十一年間の抑留に対する対政府補償について、「我々はあくまでとりさげないし、今後も引き続き要求する」と強く訴えます。

「軍事費や資本家への補償金に血税をむだづかいしても、決して住宅や失業救済に力を入れない政府である。だからといって要求をとりさげたり、利益がないから会から離れた方がよいといえるだろうか。これは敗北であり不正を勝たせることに等しいことだ。正しいことがそのままとりあげられるなら、戦いはいらないし困難はない」。

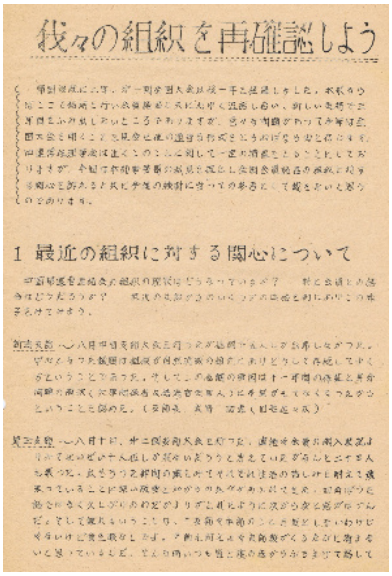
また、直ちに政府補償が得られない状況だからこそ、相互援助という規定方針が重要だと力説します。

「更に個々の人々についていえば、若干の物資のやりとり、金銭の貸借もかなり行われており、また身上相談、住宅の世話、就職の世話も決して少ない数ではないのである。（略）他に援助者のいない不幸な仲間をたすけることができることは非常に尊いことだし、それによる組織への結合は更に大切な事といわねばならない」。

ただ、中帰連に魅力を感じなくなっている会員にとって、「組織への結合」がどうして「大事な事」なのか、説明がほしいところでしょう。それに対して本部は、「我々の後半生は単に自分個人の幸福を追うために『空白』をとり戻しさえすればいいのだろうか？」「是非数年前までの中国における生活を考えてみて頂きたい、いやそれよりももう少し溯って侵略戦争に参加した自己を思いおこして戴きたい、そしてこの立場から現実を直視してみよう」と呼びかけます。

そして、会報冒頭で紹介されている国際情勢の危機、とりわけ、台湾問題への日本の役割を念頭に、元戦犯としての責任を果たすという「新たな意義」を提起します。

「我々の中には『俺は決して二度と戦争に参加しない』『二度と中国人民に銃を向けない』と考えてはいるが、他の日本人が戦争にまきこまれようとし、中国人民に銃を向けようとしていることをあまり注意しない傾向がありはしないだろうか。生活の再建に心をうばわれて日中関係の危機を見なかったり、中国に対する戦争準備が進められている現状を知らないなどという傾向がありはしないだろうか？もしあるとしたらそれは恐ろしいことであり、またまた罪を犯すことになってしまうのである。我々は日本を、日本人を再び誤った


我々の組織を再確認しよう

1 最近の組織に対する関心について

戦争に向けてはならないのであり、中国人民に敵対させてはならないのである。こうしてこそ本当の反戦平和であり、自己の責任を果たし得るのである。」

元戦犯としての責任を、時々の国際情勢の下で、平和運動や政治運動に携わりながら果たしていくというのは、確かに意義のあることです。ただ、「組織の停滞」という課題に対応できるかどうかは微妙なところです。この課題と対応策については、今後度々問われるところとなりますので、今後も注視していきたいと思います。

橋本勝さんの「風刺マンガ」

後期高齢者は「ゴミ箱」行きか！貧乏は自己責任か？

格差是正は政府の責任であり、それが「富の再分配」の税制と「社会保障」だが、それが機能していない。

【一枚の写真「特別軍事法廷」】

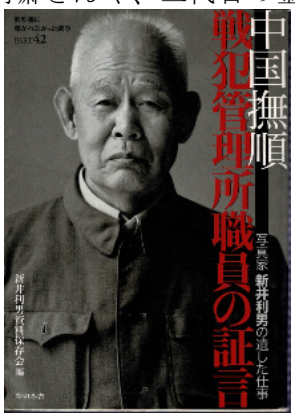
周恩来は死刑も無期も認めず 4 回却下、戦犯 1062 人のうち起訴 45 人(禁固 8 ～ 20 年、シベリアの 5 年、管理所の 6 年の計 11 年を刑期に参入、刑期満了前の 1964 年までに全員帰国)。他全員「起訴免除」で釈放帰国。

蔵　書　紹　介

「中国撫順戦犯管理所職員の証言
～写真家新井利男の遺した仕事～」

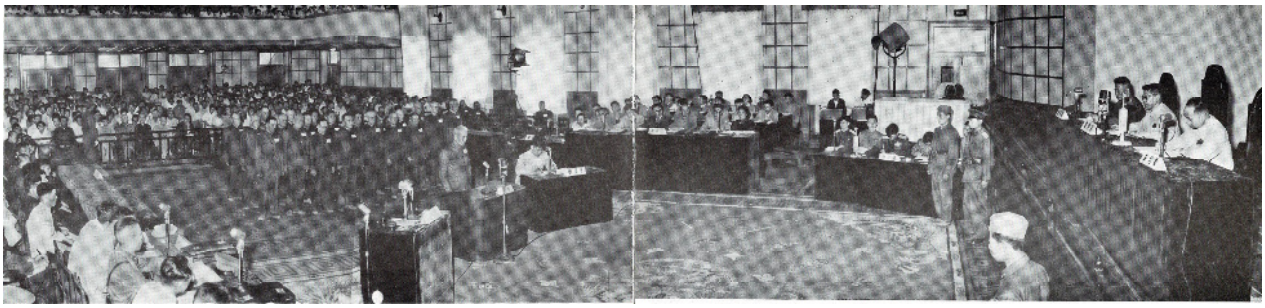
記念館には中帰連や戦争関連の本や映像資料などの多くの資料が在りますが、この本は管理所職員の皆さんの「体験・証言」を集めたものです。言うまでもなく、中帰連の皆さんの証言と一致しています。

初代管理所長の孫明斎さんや、二代目の金源所長、本紙一面でお伝えした看護婦長の趙毓英さん、管理所医師の温久達さん、金源婦人の鄭英順さんを始め管理所職員の皆さん 36 人の体験・証言が載っている貴重な証言集です。



（新井利男資料保存会・編、A5 判、480 頁、梨の木舎、2003 年発行）

『NPO 中帰連平和記念館』
〒 350-1175 埼玉県川越市笠幡 1948-6
TEL&FAX：０４９－２３６－４７１１
E-mail：npo-kinenkan@nifty.com
ＨＰ：http://npo-chuukiren.jimdo.com/
ＭＬ：npo-kinenkan@freeml.com
郵便振込口座名「NPO 中帰連平和記念館」
振込口座　：００１５０－６－３１５９１８
開館日：「水、土、日」（10:30 ～ 16:30）
（ご来館はなるべく事前にご連絡下さい）



【特別軍事法廷】（1956年7月）